

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1999年3月 No.101

胎児を守る運動

流れに従う

私達は、自分達の個人主義に、そして自分で考え自分で決断し、自分の人生を管理できる自分達の能力に誇りを持っていて国民です。しかし、実際には非常に重要な事柄に関してさえ、じつくりとその問題を考察し、神様と自分の良心の前で何を考え何をなすべきかを決定することに時間をかける人はほとんどいません。その響きを好もうと好まざると、正直に言えば、あなたも私も、しばしば「流れに従う」人間であることが多いことを認めなければならぬでしょう。

私達は周囲の考えの流れに容易に押し流され、自分達の取るべき道について考える時間がほとんどないのです。

私は日々、人生に対する基本的な正反対の考え方があることを確信しています。一方の考え方がすれば、人生は単に与えられた実的な現実としてみることができず、この考え方は、命の起源や神聖さを強調するものではなく、むしろ命の有用性を強調するものです。それは、管理の方法と私が呼んでいるものです。反対の考え方がすれば、人

生は神秘的なものとしてみられます。

それは私達の管理の下に託された贈り物なのです。この人生に対する考え方は、命の起源を私達を越えたところから由来するものであると強調しています。それはケアの方法と私

が呼んでいるものです。管理の方法は、その有用性によって人生の価値を測るものです。今日、病院のベッドで病床にっている病人は、完全に生産的な人生をおくることのできないので価値が少なくと考えられる人がいます。また社会にとって役に立たないという理由で、知恵遅れの子どもや、あるいは障害を持つて生まれる子どもは価値がないと主張する人もいます。価値の尺度としての有用性の基準は、危険で究極的

に邪悪なものです。これが管理の方法なのです。

ケアの方法はその有用性によって人生の価値を測るのではなく、その善さによって測るのです。命は神様が創造されたがゆえに善いものであり、そこに命の価値があるのです。この真理を認識することが、ケアの方法なのです。

次に、管理の方法は秩序の方法なのです。それによると、自分の人生は自分で決めるものだという事なのです。私達個人の世界の秩序に挑戦するものは何であつても、それが私達の管理できないものであるので私達を脅かすものなのです。予定外の妊娠も、それが私達の経済的な計画にあわないものであり、従って私達の生活の秩序を混乱させるものなので我慢できないのです。これが管理の方法なのです。しかしケアの方法は、自由を得るために秩序をあきらめるものなのです。ケアの方法は、人生のすべてを決定するのは私達では

なく、自分の人生を生き、他のものが彼らの人生を生きる余地を残すことが私達の責任なのです。

他のものが自らの人生像を追求するための自由を拒むこと、さらにはそのものたちの命自体を否定することとでその自由の可能性さえも拒むならば、私達は自由よりも秩序を重視したことになるのです。私達はケアより管理を選んだことになるのです。

私達が現代の困難な問題に直面しているのに気づいた時、どちらの人生観が私達を導いてくれているのかを注意深く考えなければなりません。というのは、問題は実際には、私達が「流れに従う」人間かどうかということではなく、私達がどちらの流れに従う選択をするかということだからなのです。私達はその日その日の、自分にとって都合の良い流れに流されていこうとしているのでしょうか、それとも神様の正義の流れに従っていこうとしているのでしょうか。

ギャリー・ワッツ神父

私の顔をごらんください

私の顔をごらんください。

私は胎児で、三ヶ月話し声が聞えます。

「どうしようおそろうか。」

私を殺すと言う話。

それでも私は胎の中逃げる所がありません。

私の小さなこの顔に

あなたの姿が映ってます。

私の顔をごらんください

あなたの顔とური二つ

目が大きくて口もとも

小さな胸の息づかい、

あなたの呼吸と一緒にです。

一生懸命生きてます。

何故々私を捨てるのですか。

何故々私を殺すのですか。

あの凶器の刃が

私を突き刺すのでしょうか。

私の身体は散々に

粉になって飛び散って、

それでもあなたは殺すのですか。

今日も私は胎の中。

「お母さん、お母さん」

と呼んでます。

私は希望です。光です。

私を殺さないでと祈ります。

岩永 千代子

「許し」のメッセージを伝える

中絶をした女性は、自らを卑下したり、恥じたりしているものです。中絶したことを周囲から許されている人でも自分を卑下しているし、許されていない人ならなおのこと自分を恥じています。たとえ人から許されていても、反省の中で、自分の罪や弱さを直視するために卑屈になるでしょう。

中絶をした女性は、自らを卑下したり、恥じたりしているものです。中絶をしたことを周囲から許されている人でも自分を卑下しているし、許されていない人ならなおのこと自分を恥じています。たとえ人から許されていても、反省の中で、自分の罪や弱さを直視するために卑屈になるでしょう。

しかし、恥という感情は、多くの場合現実の認識を拒むことから起るのです。否認を守り通すために、自分が認めたくない罪悪感を呼び覚ます全ての人に對して、怒りっぽくなったり、反抗的になったり、果ては憎悪を感じたりするのです。誰も自分のことをわかってくれないと感じ、みんなが自分の罪を糾弾しようとしていると思ってしまうのです。

そこで、聖職者の皆さんに、中絶手術を受けた女性への理解と同情を深める必要があるという説教を行うようお願いいたします。決して中絶を許すわけではありません。中絶を選んだ女性の証言を例にとりて話せば、人は大きなストレスにさらされると、最も忌み嫌うたことすらしてしまうのだということを通じて、望まない中絶に事実上引きずり込まれ、多大なプレッシャーにただ屈するしかなかった女性たちの話をすれば、信徒たちも中絶した女性を必ずしも責めるべきではないと考えるようになるでしょう。中絶そのものの罪深さは変わりませんが、私たちプロライフの中絶した人々への非難の度合いを和らげることができません。

この点に関して、私たちがすべきことは、彼女たちに対する理解と同情を深めて、恥の意識を軽減してあげることです。中絶を後悔している男女に深い同情を示すことにより、彼らの抱える問題を取り除くことができます。中絶後の男女にとって、傷の癒しを求め、道徳的長きものです。また、中絶した人に批判的だというプロライフのイメージを、中絶した人

なぜなら、誰よりも本人自身が強く自分を責めているに違いないからです。胎児の人間性や中絶の罪深さをくどくどと話す必要もありません。それらの真理は、中絶に関わった人々には暗黙のうちにかかっているものだからです。彼らが自らの罪を認識していようと、中絶を「必要なこと」として弁護していようと、誰もがその程度は間違いない事実を認識していません。中絶によって、一人の生命が奪われたという事実を認識しているのです。

胎児もれっきとした一人の人間であるという事実は、「赤ちゃんはどこから生まれて来るの？」という子どもの素朴な疑問への答えと同じくらい明白なものです。少しの間なら子どもの注意を他へそらすことができるでしょうが、真実を全て知るまで子どもの好奇心を満足させることはできません。生命は、受胎の瞬間に誕生します。赤ちゃんは、男性と女性の結合、すなわち、二人の存在を分かち合って、ひとつの肉体となることにより、生まれて来るのです。大人なら誰でも、子どもの頃この驚くべき事実を知った時のことを

覚えていたものです。そして私たちはみな、この事実の証人でもあります。どんなにこれを無視したり、忘れようとしたり、あるいはスローガンや哲学上の意見の相違のもとに葬り去ろうとしても、この真実こそ人が中絶に違和感を覚える理由なのです。

中絶をした多くの人は、この真実からあえて目をそらします。そんな人々に強いて直視させようとしたり、彼らの不安や恐れ、恨みや怒りを増大させるばかりで、つまりは私たちとの間の壁を高くするだけなのです。それとは反対に、彼らが経験し、感じてきた中絶の影響を理解したと伝えれば、壁は逆に低くなるはずなのです。

このように、彼らの自己防御の壁を低くさせるといふアプローチをとれば、中絶をした男女が最も必要としている神の許しの真理に導くことができます。後悔と改心の渦中にある彼らに、恥に苦しんだ後でも自由と新しい人生は開けるものだと思わせる必要があるのです。そして、彼らの罪を糾弾せず、兄弟姉妹として受け入れるという私たちのメッセージを送れば、彼らは希望を見出すでしょう。結局のところ、キリスト自ら彼らを許してくださっているのですから、私たちが彼らに最初の石を投げるなどできるはずもありません。神の許しのメッセージは、常に生命の尊厳のメッセージより先

に伝えなくてはなりません。なぜなら、中絶後の男女が亡くなった胎児のことを直視できるようにするには、まず神の許しを知り、希望を見出すことが必要だからです。

さて、中絶した人々を癒すための環境づくりとして、まず彼らの心の葛藤や動揺、苦しみを理解するよう周囲の人々を指導することが大切です。そして、そのような混乱した気持ちを抱えている本人に、自分を理解する手助けをしていきます。たとえ自分がそんな気持ちを持っていないことを認めない人がいても、「他の人」には当てはまるかも知れないと気づくことでしよう。それが重要なことなのです。「他の人」の苦しみを認めるといふその小さな一歩が、やがて自ら封印した良心の呵責に気づき、それを癒す必要に気づくこととなるからです。

最も大切なのは、失ったものの大きさに気づいている人の気持ちの理解することです。彼らの癒しの必要性を受け止め、神の寛大な許しを共に確信しましょう。私たちの信仰が、誰かを裁いて恥の生涯を送らせるためにあるのではないことを伝えましょう。私たちはみな罪人ですが、神のご慈悲により、心の平和を取り戻すことができるのですから。

中絶反対のカトリック教会

母親の胎内で育っているのは、言動は強く優しく、最も軽蔑さまぎれもない新しい人間である。れていて弱く傷つきやすい娼婦とカトリック教徒に限らずすべての人が、科学的かつ医学的証拠から判っているはずである。悲と優しさを示された。現在社人間の一人一人は、どんな人でも、尊敬に価するという事をすべての人が理解できるはずである。そして、人間の命を尊重するという事は、少なくとも意図的に、直接的に命を殺す事ではないはずである。しかし、中絶とはまさに、意図的で直接的な殺人である。

キリスト教は昔から中絶反対だったから、今のカトリック教徒もやはり中絶反対である。教皇ヨハネパウロ2世がおっしゃるように、キリスト教信者は、

「すべての人の命は神聖である。それは神のイメージに似せて創られたからである。」と信じている。生まれる前の子どもを中絶するのは、神があえてこの世に存在させる為に呼び入れられた唯一の創造物を、破壊してしま

う事なのである。キリスト教の教えでは、イエスキリストを見習いながら後について行くのが、私達の義務であるとも言っている。イエスの

うと広まらまいと、カトリック教徒はこの仕事を続けるであろう。

キリスト教では、常に、強くはつきりと、人間の命の神聖さについての教えが維持されている。イエスキリストは彼の教えと奉仕の中でも、それを強調している。最も古くから読まれているキリスト教の教義書「データー」でも、中絶は拒否されている。

3世紀の、教会の父と呼ばれる神学者テルトゥリアヌスは、中絶について、「早い時期の殺人だ」とおっしゃった。昔の教会協議会では中絶を最も重大な罪のひとつだと考えている。アリストテレスの時代でさえ、教会法では、早い時期と遅い時期での中絶にそれぞれ異なった罰を与えていた。どの段階での中絶も、重大な悪として考えられていたのである。

その頃から21世紀を迎えようとしている今、子宮内での子どもの人間性が、科学により更に確認された。公式の教会の教えでは、現在に至るまで、社会が生まれた後の命を守るように、生まれる前の命も守るべきであると主張している。

プロ・ライフ

「命は救われた」

友人の父親がアルツハイマーにかかり、入院していました。意識がはっきりしない状態が続き、食事を取ることもままならなかったため、流動食用のチューブが入れられました。しかし、苦しい状態は続きました。数日後、ここ数年の病状や現在の健康状態を考慮すると、これ以上苦しむのは可哀想だからといって、医師団が、そして、あることが病院付きの司祭までがチューブをはずすことを提案したそうです。食道チューブは最終的な手段なので、取りはずすことによって患者は苦しむことなく昏睡状態になり、安らかに死ねるのだと、保証してくれました。

友人は非常に悩み、家族からはこれらの【専門家達】の悪質なアドバイスに従うように懸命に説得されました。私は彼女に安楽死についてのパンフレットをあげました。彼女はそれを読み、餓死はあらゆる死の方の一つであることに気付きました。

彼女はただちに悩むのをやめ、父親の生命の維持のために一人で戦う勇気が湧いてきました。現在、彼女の父親は快適な療養生活を送っています。今では、物を食べることもできるようになり、病院中の【専門家達】の度肝を抜いてばつの悪い思いをさせるほどになりました。神の力は偉大なり！安楽死の実状をこれほどまでに明確に証明できる例はないでしょう。いったい今までいくつのか弱き人間の命が、神の名を口にする【専門家】によって、締められてきたかと、考えずにはいられません。

celebrate life 7-8/96

愛と絶望と希望を一緒に織り込んで

カトリック信者が医学の力を借りた自殺や安楽死への反対姿勢を強めるなか、なぜ人が（特に落胆から立ち直れない人が）死を選ぶかがわかれば、未然に防ぎ肯定的に生きる方法を見いだせるかもしれない。そこで、愛と絶望と希望を一緒に織り込んだタペストリーを紹介しようと思う。

22年前の母の自殺が私を変え、今なお死について考え続けている。当時、親戚達が自殺は許されざる重い罪だとひそひそ噂していたのを覚えている。「みっともない」と嘆く人もいた。

だが、周囲はほとんど口を閉ざしていた。葬式の時母の死について誰一人触れることなく、お悔やみの言葉すら聞かれなかった。誰も原因を尋ねようとしなかった。当然といえばそうかもしれない、20数年も前だったから。参列者の大半は軍隊の父の同僚で、形式上はキリストの葬儀だったが、両親は熱心な信者にはほど遠かった。

夕食前、たまに祈ったが、子どもの頃の記憶で、教会に行ったのは数えるほどしかない。両親にとってキリストはその程度の存在だった。父にとっての神は

勉強や仕事における成功や達成、母にとっては自分自身の美しさ（彼女の夫）が全てだった。現在は、うつ病には生体学的に根拠がある場合も多いと解明されており、教会でも、落胆した人達に病院へ行くことを勧められている。教会が運営するカウンセリング・センターも多数ある。自殺はかつてほどはタブー視されなくなってきたが、依然として世界中で毎年百万近い人達が自殺している現実もある。キリスト教でも「汝、殺すなかれ」の教えがあるように、かなり難儀な問題である。癒しを求めてもがく人が多いのに、どうやって慰めてあげればいいのか周囲がつかめずにいる。

もある。子ども時代からの自分の記憶をたどりながら、母の人生について語ってみたい。「嘘よ！嘘にきまってる！！」慌てて帰ってきた夫フランクから母の死を告げられた時、思わず悲鳴をあげずにはいられなかった。しばらくしてやっとの思いで「どうやって？」と尋ねたほか、言葉を発する気力もなかった。青ざめた顔の夫は何も答えない。聞かなくても答はわかっていたが、それでも尋ねずにいられず「ねえ、どうやって？」語気を強めた。夫は私を抱き締めて「ヴィッキー、お義母さんは一酸化炭素中毒で自殺した」と答えた。とっさに、母が自家用車の中で独り、窓の外を眺めている光景が目につかんできた。自分自身の死について、母は何を考えていたのだろうか？

たのが間違っていたと、私に語ってくれた。18歳で母は、ハンサムで教養も野心もある父と結婚した。その後、父は空軍将校となり、一人目の娘（私の姉）が生まれ、何もかも順調だった。朝鮮戦争が始まり、父が戦地へ赴任中、母は家族とカリフォルニアに移り住み、そこで私が生まれた。三年後に弟も生まれ、どこから見ても申し分ない、幸せな家庭と言えた。ところが弟の誕生直後、母はうつ状態となった。私が六歳の時だ。

私が小学生の頃、母が何週間も回復せず、料理も掃除もせず誰も口をきかず、ベッドから起き上がるうとしないこともよくあった。汚れた食器はたまる一方、缶詰を空けてそのまま食べたりもした。父からは何の説明もない。暗黙のルールで、何事もないようにふるまわねばならなかった。数週間後のある日、私達姉弟三人が学校から帰ると、チョコレートケーキの焼ける香ばしい匂いと外まで響くステレオの音がする。母が「戻ってきた」サインだ。うつ期を脱し数日間、自然にウェーブのついた赤茶色の美しい髪をリボンで結び、前日までの出来事が嘘のように、ごくごく普通に行動をする。今思えば、何かにおびえ逃げ出そうとする子どもに接するのと同じように、家族みんなで母を包み守ろうとしていた。うつ状態のことには触れず、快活な時の母に深い愛と感謝をもって接した。ジェットコースターのようだった母の人生。もともと内気なため、独りで過ごすことが多かったが、高揚した気分時は、鮮やかな色のものやスパンコールのついたイブニングドレスを着て、ハンサムな父にエスコートされて踊りに行くのを好んでいた。もっとも、父が昇進にかかわる仕事や後輩の指導で忙しくない時に限ってだけれど。慣習や団体行動には目を向けられないで、教会にはほとんど行かず、何かサークルに入ることもなく、家事も嫌がり、趣味も持たなかった。引越すたびに新しい土地で一人だけ友人を見つけていたが、むらのある性格のた

昔モデルをしたこともあり、とても美しく、私によく絵本を読んでもくれ、詩や小さな子ども達を愛していた母の人生がこんな形で終わるなんて。

祖母は、おとなしくて美しいことを第一に娘（私の母）を育てたのが間違っていたと、私に語ってくれた。18歳で母は、ハンサムで教養も野心もある父と結婚した。その後、父は空軍将校となり、一人目の娘（私の姉）が生まれ、何もかも順調だった。朝鮮戦争が始まり、父が戦地へ赴任中、母は家族とカリフォルニアに移り住み、そこで私が生まれた。三年後に弟も生まれ、どこから見ても申し分ない、幸せな家庭と言えた。ところが弟の誕生直後、母はうつ状態となった。私が六歳の時だ。

私が小学生の頃、母が何週間も回復せず、料理も掃除もせず誰も口をきかず、ベッドから起き上がるうとしないこともよくあった。汚れた食器はたまる一方、缶詰を空けてそのまま食べたりもした。父からは何の説明もない。暗黙のルールで、何事もないようにふるまわねばならなかった。数週間後のある日、私達姉弟三人が学校から帰ると、チョコレートケーキの焼ける香ばしい匂いと外まで響くステレオの音がする。母が「戻ってきた」サインだ。うつ期を脱し数日間、自然にウェーブのついた赤茶色の美しい髪をリボンで結び、前日までの出来事が嘘のように、ごくごく普通に行動をする。今思えば、何かにおびえ逃げ出そうとする子どもに接するのと同じように、家族みんなで母を包み守ろうとしていた。うつ状態のことには触れず、快活な時の母に深い愛と感謝をもって接した。

ジェットコースターのようだった母の人生。もともと内気なため、独りで過ごすことが多かったが、高揚した気分時は、鮮やかな色のものやスパンコールのついたイブニングドレスを着て、ハンサムな父にエスコートされて踊りに行くのを好んでいた。もっとも、父が昇進にかかわる仕事や後輩の指導で忙しくない時に限ってだけれど。慣習や団体行動には目を向けられないで、教会にはほとんど行かず、何かサークルに入ることもなく、家事も嫌がり、趣味も持たなかった。引越すたびに新しい土地で一人だけ友人を見つけていたが、むらのある性格のた

め長続きしなかった。いつも独りて読書するか、ぼんやりと空想にひたっていた。

年々症状は悪化し、私達姉弟はやらねばならない家事が増えていった。それでも私達は病気とは気づかず、ひとつの生き方と信じていた。学校ではいい成績、家では母の世話、頑張りすぎの子もだったように思う。友達もたくさんいたが、不思議なことに家では遊ばなかった。どこか不安定な、散らかっていて落ち着かない家に人を呼ぶにも呼べなかった。

ベトナム戦争が始まってしばらくすると、父にも招集がかかり、家族は基地に残ることになった。父は生活費の自動送金を手続きし、家の中のことを私に託し旅立った。私も16歳になり運転免許も持っていたので、野菜や日用品の買い出しには困らない。だが信じられないことに母の『発作』については一言も触れなかった。

最初一ヶ月ほどは安定していたが、その後やはりうつ状態に入ってしまった。胃の調子も悪かったため、よく母を病院へ連れて行った(母は運転に拒絶反応を起こし、自分で運転できないようになっていた)。

医師にバリウムを処方され、母はこの薬ですべてよくなると信じただかのように思えた。医師

は母が望めばいくらでも同じ薬を出した。

姉と私は、母の状態が悪化していることを知らせるため父に手紙を書いたが、父は任務で手が離せない。ようやくベトナムから戻った頃にはさらに悪化し、母はもうベッドから起き上がることにすまめつたになかった。輝くように美しかった髪も汚れ、櫛を入れることすらなかった。

それでも父は見えて見ぬふりも続けた。バリウムを常用するうち、母に一時的視覚(意識)喪失が起こり始めた。だいぶ後になつて、バリウムの長期にわたる服用が原因でこうした症状が起こりうると知った。ここまできても父はなんとか理由をつけて母の奇行を正当化しようとしていた。

ほころびを必死に繕いながら一年近く暮らしていたがある日、バスタブの中で手首を切った母を帰宅した父が発見し、大急ぎで軍の付属病院へ連れて行った。ついに専門家の手に委ねる時が来て、父は母を精神病院に入院させると言って譲らなかった。一九七三年当時は鎮静抑制薬がまだなく、行動修正プログラムに加え週一回のショック治療が行われた。

私は結婚し、働きながら大学に通っていた。病院へ母の見舞いに行くと、放心し、狂気に満ち

たような患者達の表情に驚いた。母は私に「こんにちは」ばかり言い続ける患者を紹介してくれた。「彼はやめるのが怖いよ」と母「でも、どうしてなのか自分でも理由がわからないの」

時とともに母の症状は悪くなるばかりで、少しも良くならない。ある日医師から、母は協調性がなく、ベッドメーカーキングを嫌



がり、何事にも反抗的だと言われた。当時私はまだ19歳だったが、この先生は母が心のよりどころをなくすよりも協調性のなさを問題視するなんてと、疑問を抱かずにいられた。自殺願望のある女性が自分のベッドのことなど気にするだろうか? もっと深い部分に問題があるはずである。

私が訪ねると、母はちょっと明るい表情を見せた。楽しい会

話で母を元気づけたかった。いつも、香水ビン、本、キャンディなど、母が喜びそうな小さなお土産を持って行った。しかし、行く度に、母の瞳は重たく閉じかかっていたから、母の容体になんか気が遣った。

その頃は聖書を読み始めていた。たまらなく不安で、解決策や救いの手を必死に求めていた。ヨハネによる福音書を最初に読みはじめたのは、初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。という美しい出だしをかなり前に暗記したためだ。当時ははつきり理解できなかったが、何か胸に響く文章だった。どうしたら言葉が神になれるのか? 神の言葉を読み、その中に神の姿を見出さねばならないのだとようやく気づいた。

さつそく実行に移した。毎晩聖書を読み、母を訪ねる時に、内容の一部を話してみた。母の心にも届いたようで、多少回復の兆しが見られ、一時退院が許された。しかし結局は負に向かう力に屈してしまつた。

私達はカウンセリングを受けるところか、実はこの問題について家族ですら話し合っていない。父は深酒するようになって、母は生化学的障害を起し、薬を止めていた(おそらく、そう

うつ状態だったのだと思う)。友達もなく、一番下の子どもも家を出ていた。あんなに美しくかつた母の容貌も衰えている。

さらに二度の自殺未遂があった。一度は、病室で薬を大量に飲んで助かった。薬を飲む直前、何を考えていたのか聞いてみると、母は見えない何かにおびえる小さな子どものように、今にも泣き出しそうな顔でこう答えた。「ウィッキー、全然覚えていないの」本当に覚えていないのだろつ。医師にそう伝えると、ただ黙つて頷いただけだった。

自分の祈りが届いて母が回復しますようにと、その後数週間、祈つては泣き、時には大声でわめいてはまた祈るといつ日々が続いた。だが、約一ヶ月後の午後、母は黒い服を着てガレージへ降りてきて、車の中で死んだ。

死の一週間前、母はステレオで「Amazing Grace」を聴いていたと、叔父が教えてくれた。「なぜ」という問いの答は簡単に出るはずがない。私も20年以上も考えているのに、まだわからないのだから。

神がどんなにこの世を愛しているか、よくわかる。近頃、自分と神との結び付きが一層強まったと思う。以前は気づかなかつたが、今は、神はすべての人間からの返答を切望し、ひとりひとりに呼びかけている。私達の意

思の出発点である心の中も見通している。

自殺はいけない事か？確かにいけない。自分で自分の命を終わらせるのは神の意図ではないから。天国で私は母に会えるだろうか？わからない。神は「裁くなかれ」と言っているし、母は死んだ時に、正常な精神状態ではなかった。今でも母を慕い、いつの日か回復し、癒され、救われた母との再会を待ち望んでいるか？もちろん、心から！いつまでも母をいとおしむ思いは消えない。

故意による誤った選択と、病気を区別するのは難しい。私が覚えている、澄んだよく通る声で歌い、温かな抱擁をする、きれいな色のリボンで髪の毛を後ろで結んだ母は、世俗的選択や誘惑の波に飲み込まれてしまった。

母は頼もしい父に助けてもらえると思っていたが、父はその力がなかった。母は自分の美しさがずっと続くと思っていたが、そうはいかなかった。恋愛小説と黄色い薬から安らぎを得られると思ったが無理だった。イエスだけが唯一の希望だった。彼女が生きる最後の糸にすがり、十字架にかけられた盗人のように、泣いて救いを求めてくれたらと願う。

どの命も神にとってかけがえないもので、それぞれの精神状態は神にしかわからない。うつ状態が進むと、肉体・感情・精神すべてに不調が生じる。だからクリスチャンとして私達は愛と理解をもって接しなければならぬ。

また、自殺など難しい問題についても考えねばならない。個々の体験を語り合うことで神不在の人生の脆さを世に訴え、自殺という不可解な行為を多少なりとも踏み込んで、人間の内面に迫ることができるかもしれない。過去の例を参考に、生化学的角度からうつ病をとらえ、人々がもっと積極的に取り組めば、解明に向けて大きく前進するだろう。しかし何より大事なものは、神についての理解である。神の英知とその子イエスの恩恵こそが、誰もが求める究極の心の癒しであり希望なのだ。

信頼の必要性

しばしば私たちは、与えられた仕事をやり遂げるのに、自身自身の力に頼ります。私たちの人間的もろさをめつたに考慮に入れられませんか。私たちは、絶えずより多くのことをし、より大きなものとなり、より多くのものを手に入れようと、努力することです。この信念は、新時代の哲学の根底にあります。「心に抱くことができるもの全てを体が成し遂げることが出来る」は、新時代社会の共通の声明です。「あるものに焦点を合わせ、あなたがそれを出来る信じれば、あなたは何でも成し遂げることが出来る」。神に頼るのではなく、私たちは人間の手段によつてのみ、解答を探そうとしているのです。

残念ながら、私たちは神を信じることを拒むとき、神が私たちのためにできることに限界をもつてしまいます。イエスは自分の治療の奇跡を実行する前に、まず病人に自分たちが治ると信じるかどうかを問いました。しかし、イエスが自分の故郷を訪ねたとき、12人の弟子を呼び集めるのに先だって、「ここでは

何の奇蹟も行わず、…イエスは彼らの不信仰に驚かれた。」(マルコによる福音書 六：5) 6。

これはルカのキリスト誕生の説明と対照的です。「ああ幸せなこと、主から言われたことの実現を信じた方は」(ルカによる福音書 一：45)。このエリザベトからマリアへの言葉は、神への自信に満ちた信仰の重要性を表しているのです。イエスが地上を歩かれたとき、彼を完全に信じ、彼の言葉をその通りに受け止める人に出会うこと以上に、彼を満足させたものはありませんでした。

そして、今日、私たちが圧倒されるような重荷に立ち向かうときや、将来に恐怖を抱くとき、その時こそイエスの言葉を思い出さなければならぬのです。「恐れることはない。ただ信じよ」(マルコによる福音書 五：36)。この一節は「恐怖は無意味です。必要なのは信頼なのです。」とも訳されます。神は偉大なことができます。神は宇宙の全能の統治者なのです。しかし神の計画

の中で、神は私たちに神を信じることを要求します。

「心をあげて神を信頼し、自分の意見に頼るな。足どりの歩ごとに神を考えれば、神はあなたの道をならしてくださる。」(格言の書 三：5-6)

私たちの多くは、私たちが信じる人々から何度も裏切られてきたため、私たちの心配や重荷の全てを神に託すことに難しさを感じます。私たちは主が神であり、宇宙の創造者であり、神によつて全てのものが存在することを忘れてはいけません。

「私たちの内に行われる力によつて、私たちのすべての願いと考えをはるかに超えて、どんなことでもできるお方に、教会とキリスト・イエズスによつて世々代々光栄があるように。アメン。」(エフェゾ人への手紙三：20-21)。
ステイブン・ブルック



読者より

いつもプロ・ライフ・ニュースを夫婦で拝読しています。夫も、今では、中絶に興味を持ち、考えないといけない問題だと言っていました。

私自身も弟が知的障害を持つていますが、障害が違うとはいえ、ダウン症の方々の問題には他人事とは思えません。

テレビを見ながら書いていますが、先ほど韓国でクローン人間の技術に成功したとテレビで言っていました。驚きと同時に悲しくなってきました。許されない行為です。私に何が出来るか真剣に考えないといけないですね。

高松市 Y・Nさん

性・生命について素晴らしい記事がたくさん見つけ、是非購読したいと思つています。バックナンバーがあれば、お願いしたいと思えます。皆様の尊いお働きの上に豊かな神様の祝福がありますように。私は横浜市のカトリック新子安教会の信徒です。湘南工科大学の教員で、哲学と倫理学を教えています。カトリックの学校ではありませんが、神が創造された生命の尊さを教え、安易に中絶してしまふことのないように学生に教えようとしていますが、良い教材には恵まれません。この度、貴方

が作成された優れたビデオや書籍、パンフレットがあると聞き、教材として使えれば、幸いです。以下の通り注文いたしますので、よろしくお願いいたします。出来たら、後期の授業で使いたいと思いますので早めに手配していただければ、さいわいです。(略)

横浜市 T・Sさん

もう少しやわらかい言葉で、やさしい気持になれるものになりませんか。強烈すぎて、気分が悪くなります。一方的に責めるだけでは救われたいのではないですか。両方の気持をくみ取る必要があると思います。

姫路市 Kさん

いろんな活動に興味を持ち、のぞいているうちに自分の目標がよく分からなくなつてしまいました。しばらくご無沙汰しており申し訳ございません。今年六月に結婚致しまして、名前が変わりました。最近私は切迫早産と診断され、十月末退職いたしました。これも赤ちゃんのためです。『赤ちゃん10ヶ月の旅』三冊送っていただきたいので、よろしく願っています。もしも、送金不足の時は請求ください。

名古屋市 N・Cさん

いつも、いつもレターを送つて頂き、有難うございます。多忙な毎日で、「あっ、またレターが届いて

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

事務所時間：

月一金 12:00 - 18:00
日のみ 14:00 - 18:00
土曜日 休み

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニューズレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

御送金

銀行：四国銀行朝倉支店
口座番号：0573553
日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局：「郵便振替」
現在口座番号：01660-5-39607
日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

『クローン人間現実に？韓国で体細胞の実験に成功』と読売新聞12月17日に記載されました。30歳代の女性の未受精卵から核を取り去った後に、この女性の体細胞の核を移植し、四つの細胞に分裂するまでに培養成功。社会的な認知が行われなければ、これ以上の実験は行わないとしながらも、この細胞を女性の子宮に戻せば、この女性と遺伝的に同じ子どもが生まれるはずになる。

私達一般市民が科学研究の目指しているもの、その結果何が起こる可能性があるのか知ろうとする努力を続けることが21世紀社会を成熟させていくと国際基督教大学村上陽一郎教授は述べておられる。

一方、一ヶ月後の高知新聞社では、『新世紀百円メッセージ』（一つ一つに英語で要約をつけ、二月から三月にかけて遠洋マグロ漁船に依頼し、各海域で流してもらった）を企画し、参加者の思いを中間集計していた。それによると、21世紀に求め、伝えたいのは「平和」と「愛」となっていた。

私達のほとんどは「平和」と「愛」を願っていることが分かるのですが、「自分の平和」は「隣の人の平和」があつてはじめて、実現できるものであることを今、一度改めて考えなおしてみることが大切ではないでしょうか。小さいいのちをなごりにして、自分の平和を願ってみても、決して、それを受け取ることが出来ないものだと思うのです。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

7ページから

いる。」と思っても、他の郵便物と一緒に積んでおくことが多いのですが、捨てるわけにもいかず、一応目を通してみようと、封を切ると、他の仕事を中断して、つい最後まで読まされてしまいます。（失礼なことを言っていますね。ご免なさい。）でも、最新の、説得力のある文が多く、感心しています。これからも、がんばって下さい！

東京都 K・Kさん

いつも心にひびく記事をお届け下さり、有難うございます。少して申しわけありませんが、献金させていただきます。

鎌倉市 Sさん

この運動は現代の最も大切な運動の一つだと思います。声援を送っていますよ。

仙台市 T・Kさん

プロ・ライフ・ニュースを毎月お送り下さいまして有難うございます。今年も無事にクリスマスをお祝い出来ることを感謝いたします。主に愛されて、72回目のクリスマスです。主人もきつと天国で可愛い孫達を見ているでしょう。少しですが、送金させていただきます。

宮崎市 O・Kさん

いつも良いレターをありがとうございます。神様のメッセージをどんどん世の中にお送りくださいますように心からご苦労さまと申し上げます。お祈りのうちに

京都市 Kさん

メリークリスマス 限りない祝福を！！

生命の主、愛の泉であられる救いのみ子のメッセージが人々の心にとどいて平和と喜びに満たされて行きますように、願いをこめて、ほんの少しばかりですみませんが届けさせていただきます。

長崎市 Oさん

小さいのちのために働かれる皆様のために勇気と力を祈っています。

名古屋市 T・Mさん

＋α降誕おめでとうございます。いつもとても良いニュースをありがとうございます。充実していて、本当に大切に、又、知りたかったことが沢山分かっております。本当に少額で申しわけありませんが、お役立て下さいませ。神様のこの上ない祝福をお祈り申し上げます。

佐倉市 I・Hさん

幼きイエス様の誕生を前に今日(17日)、女子大生の寮に命の大切さと喜びを伝えるためプロ・ライフ・ニュースの12月号と「命・美しいもの」「命・贈り物」のビデオとシンボルピンを持って、若い女性たちと分かち合うチャンスに恵まれました。皆様の働きに支えられながら、少しずつ輪を広げられたらと願っています。

千葉市 K・Yさん